

## 伝記的記述の客観性について

— E・ブッシュ『K・バルトの生涯』をめぐって —

小川 圭治

E. Busch: Karl Barths Lebenslauf - Nach seinen Briefen und autobiographischen Texten - München, 1975 の日本語訳書 (E・ブッシュ著、小川圭治訳『カール・バルトの生涯』その書簡と自伝的文書による) (新教出版社) が刊行されたのは、一九八九年八月であった。幸いにも好評をもって迎えられて、一九九五年四月には改訂新版が出版された。この新版では、その間に読者からご注意をいただいた不適切な訳文や、著者ブッシュから手紙で伝えられた原著の訂正箇所などを手直しして、装丁もバルトの好みの色であるブルーにし(二六六頁参照)、写真もバーゼルのバルト文庫から原版を送っていただいで、鮮明なものに印刷し直した。

ところがその年に、武田清子著『戦後デモクラシーの源流』(岩波書店、一九九五年) が出版されて、ブッシュの『バルトの生涯』中の、武田氏自身についての記述に「誤りがあると思う」(前掲書一八七頁以下) と指摘しておられることを、井上良雄氏からご注意を受けた。それを読んで私なりの結論は一応出ている

伝記的記述の客観性について (小川)

たのであるが、その後私の身辺多忙のために、その内容を明確にした文章にまとめる余裕がなく、最近になってやっと書いてみる事ができた。まずその私の結論から申し上げると、確かに武田氏の論述は、ご自身の体験に裏づけられていて、武田氏の側から見るかぎり妥当なものと言えるであろう。しかし伝記記者ブッシュの立場から見ると、それは『バルトの生涯』の、伝記文学としてのユニークな構成と性格とに関わっていて、バルトが間違っているとか、ブッシュの思い違いであるとか、簡単に言い切ってしまうところがある。以下、その点を明らかにしてみたいとおもう。

### 一 問題の場面

武田氏が指摘しておられるブッシュ『バルトの生涯』の問題の場面は、次のとおりである(五六—三頁)。

〔彼(バルト)は、夏の休暇の間——(ローヌ)ヌ川渓谷上流のスイス・アルプス山麓の村) サン・リュックでのトウルナイゼンと共に送った数日の楽しい休暇の後に——(一九五三年) 八月末に世界教会協議会(WCC)のエヴァンストン大会のための諮問委員会の三回目の準備会議に出席した。彼は、喜びが増し加わるのを感じながら、この準備委員会に参加した。しかし、それより前、一九五一年には、七月二〇日から三〇日まで五人の専門委員会が、初めてこの仕事のために招集された。バル

一四九

トはこの会合には、あまりよい思い出を持っていなかった。「もちろん、われわれはそこに腰掛けて話し合いました。……一〇日間も。健康な白い歯を持ち、非常にはつきりした態度で、しかしあまり問題は持っていない（ニーバーを筆頭とする）アメリカ人たち……イギリス人たち（彼らの中で最も注目すべき男は、エディンバラから来た、すべてを蹂躞するペイリーでした）、ドイツ人たち（ここでは思慮深く愛すべきハインリッヒ・フォージェルとハイデルベルクから来た聡明なシュリンクに言及すべきでしょう）、オランダからはフーケンダイク……とクラメルが、プラハからはフロマートカが、セイロンからはナイルズが、フランスからは正教会のプロローフスキーとロジャール・メルが、「スウェーデンからはヴィングレン氏が、黄金海岸からはバエタ夫婦（二人とも膚は真黒でしたが、私にはとても親しくしてくれました）、日本からは知性のきらめきをそなえたミス武田清子が、彼女は本式の神学を学ぶためにドイツ語を習得したいと望んでいましたので、私は休憩の時間に、この言葉のいくつかの秘訣を教えてあげました。そして愛するスイスからはエミール・ブルンナーと私でした」（一九五一・八・二五、クリストフ・バルト宛）。バルトは当時、この会議の主題全体を取り上げている精神にはほとんど満足できず、むしろまったく失望していた。彼は会議がアメリカでなく、ニューデリーで開催されることを支持し——さらに主題を「教会と世界の希望」ではなく、「イエス・キリスト、十字架につけられた主、世界の唯

一の希望」とすることを主張したが、この段階では採択されなかった。会議のテーマについて考えている際に、ニーバーが、こともあろうに終末論を「除いて」しまおうとした時、バルトは「激昂して、彼としてはもう希望はないと考えて……この場から立ち去ろうとしました」。だがそれを引きとめたのは、あの日本人の女性で、彼女はバルトとニーバーを対話のプラットフォームに導くことに成功した（一九五一・七・二六、O.P.フォン・キルシュバウム宛、ネリ・バルト宛）。それにもかかわらず、彼は、「非常に混乱した印象をもって」バーゼルに帰ってきた——WCCには「私がこれから先も協力すべきかどうか」疑問を抱いたままで。「アングロサクソン系の人たち、エキユメニカル・スマイル……さまざまな視点に立つ永遠の調停……これらすべてのことは、少なくとも長い時間付き合っていると、私をひどく疲労させました」（前掲クリストフ・バルト宛）。「私たちはこともあろうに、キリスト教的希望について、喜びを感じる代りに、非常に頭を痛めなければならないこと」を、バルトはとりわけ残念に思った（一九五二・三・一一、ステイブ・ニール宛）。その当時、アメリカの雑誌のために書いた論文で、彼は「キリスト教的希望」の特殊性についての彼の理解を、次のように要約した。「キリスト教的希望は、他のすべての人間の希望が終焉する出来事、つまりゴルゴタの十字架上のイエス・キリストの死に基礎を持つ」と。】

## 二 「間違っている」との指摘

このブッシュの記述に対する武田氏の指摘は、前記「戦後デモクラシーの源流」所収の「人間と歴史への考察—ラインホルト・ニーバー生誕百年に」という、一九九四年四月に行われた講演の「四、ニーバーとバルト」にある。まずブッシュの「バルトの生涯」の記述の最初の部分、つまり一九五一年七月二〇—三〇日に開かれた世界教会協議会のエヴァンストン大会のための第一回準備委員会の時と場所の設定と二五人の参加者（その中にバルトも武田氏も含まれている）などの点については、両者共に問題はない。後に述べるブッシュ側の答えとの関係で、特に注意していただきたいのは、この部分は一九五一年八月二十五日付、当時インドネシアに宣教師として滞在中の次男クリストフ・バルト宛のカール・バルト自身の手紙の引用だということである。しかし武田氏の視点に立つと、それに続くバルトとニーバーと武田氏とのやりとりについての記述に、次の二つの点でブッシュの記述が「間違っている」という。ただし、この部分は、後に触れるように、先の次男クリストフ宛のカール・バルト自身の手紙の引用の続きではなく、一九五一年七月二十六日付の、彼の秘書ロロ・フォン・キルシュバウムが、パーゼルのネリ・バルト夫人に宛てた手紙の引用であることに注意していただきたい。しかしまず、武田氏の指摘の内容を正確に確認するために、少し長くなるが、ここでその要点を引用しておく

伝記的記述の客観性について（小川）

たい。

その第一点について、武田氏はひとつのエピソードとして次のように述べておられる。〈一九五一年の七月、スイスのジュネーヴ郊外のロールというところで、“hope”（「望み」、いいかえれば eschatology「終末論」の問題）をめぐって、二五人の神学者の会議がありました。（ボッセイのエキュメニカル研究所は翌年開設されました。第二回と第三回の準備委員会の会場となつた・小川注）。わたしは、たまたま、……ヨーロッパに行つてましたが、WCC総幹事のヴィザトゥフト博士のお招きで、この会議に出席させていただきました。これは、その二年後の一九五四年に開かれる予定になつていた、WCCのエヴァンストン会議、即ち、第二回世界大会の主題が、“Jesus Christ, the Hope of the World”（「イエス・キリストは、この世の望み」）となつていましたので、その“hope”をめぐつての神学的論議がなされたのでした〉と場面の設定をしておられます（『戦後デモクラシーの源流』一八七頁）。その上で次のように言われています。〈ここでちよつと触れておきたいのですがエーバーハルト・ブッシュが書いた『カール・バルトの生涯』（小川圭治訳）という本がありますが、その本の五六二頁に、このエヴァンストン会議のことが、出ています。この部分における記述には、わたしは間違いがあると思うので申し上げるのですが、この本には「教会と世界の希望」ではなくて、「イエス・キリスト、十字架につけられた主、世界の唯一の希望」とすることをバルトが主

張したが、採択されなかったといっています。しかし、WCCは、「教会と世界の希望」というテーマの出し方をしていたのではなくて、「Jesus Christ, the Hope of the World」を主題と考えていたのです。……その「hope」の理解をめぐって討議し、神学的裏づけを明らかにしようとする会だったのです。プッシュは、どこから得た資料によったのでしょうか？ このプッシュの記述は間違っていると思います」というのです（前掲書一八七頁以下）。さらに第二の点として、武田氏は次のように言われる。「もう一つ、この箇所間違っていると思うことがあります。この会議のテーマについて考えている際に、「ニーバーがこともあろうに終末論を除いてしまおうとしたとき、バルトは激昂して、彼としてはもう希望はないと考えて、この場から立ち去ろうとした。だが、その時引き止めたのは、日本の女性で（とは私のことなのですが）、彼女はバルトとニーバーを対話のプラットフォームに導くことに成功した」と、書いています。プラットフォームというより、小さな部屋で話し合いました。しかも、これはあとでふれますが、ニーバーが終末論を否定するなどということはありえないことです。ニーバーは決して終末論を除くなどといったわけではないのです。先ず「hope」（望み）についての考え方ですが、この会議において、「hope」を「Great hope」と「small hope」として論が進められて行ったことは重要だと思えますし、私は非常に印象深く心に刻まれました。イエス・キリストが再び来給うた時、最後の審判の時、時の終

わり、時の成就する時、それが「Great hope」であり、われわれは、それを待ち望んでいる。しかし、われわれはキリストの来給うた時と終わりの時との中間時に住んでいるわけですね。その中間時におけるキリスト者にとつての「hope」とは、一刻一刻、歴史の中で神の審きを受け、キリストのとりなしの赦しによつて新たにされて立ち上がる望みを与えられており、その望みに生きている。それは「small hope」複数の小さな望みである。歴史の中のキリスト者は、「Great hope」と「small hope」との緊張関係の中にある。このような考え方をニーバーもヴィザトゥフトも主張し、この会議の大意になったと思います」というのである（前掲書一八八頁以下参照）。

### 三 著者の側からの答え

武田氏の側から、このような問題の指摘が生じてきたのは、プッシュの『バルトの生涯』というこの書物が、その独特な伝記文学としてのスタイルを持つていることに起因している。それについては、訳者として、いくつかの機会に述べてきた。また著者プッシュ自身も、この書の「はじめに」、次のように書いている。『バルトの生涯』は、本書の副題が示しているように、彼（バルト）自身の言葉に密接に依拠して（彼の手紙と自伝文書によつて）記述されている。したがつてこの伝記の著者の言葉は、出来る限りカール・バルト自身の言葉の背後に退いて行

く。本書の著者の言葉は、付随する叙述の部分と、バルト自身の手で書かれ、その口から語られた言葉の多様な引用が、広大なモザイク模様で構成された際の「つなぎの言葉」とに、限られている。二次的文献が引用されることもあるが、それはまったく例外的である」（はじめに「Ⅳ―Ⅴ頁」）。

したがって本書の文体は、訳者のあとがきに私が書いたように、「できるかぎりバルト自身をして語らせるために、本書は書簡と自伝文書の引用から成り立っている。引用文中の一人称は、同じ文章内でモザイクのつなぎのプッシュの文章の三人称になる」（七―七頁）。この奇妙な文体を日本語としても通読可能とするために、引用の書簡や自伝文書の出典を、原書では巻末にまとめてあるのを本文注にして、毎回入れることにしたのである。しかし、それも「手紙と自伝文書による」という本書の独特なスタイルによるものであり、本文注に示されているように、誰の、誰宛の、いつの手紙であるかを確認して、お読みいただきたいのである。そうすると、それぞれの引用が、当時の関係者たちの、その時点における見方であり、そこには矛盾や対立も出てくるのがわかると思う。著者プッシュは、そういう形での伝記記述における客観性を貫き、それによって、伝記記者の、ではなく、できるだけ、記述されるバルトその人の、その当時の客観的な伝記像を浮かび上がらせようとしたのである。そのため、歴史的資料の解釈をめぐって、さらに伝記的記述の客観性について、むずかしい問題がでてきたことも確かだ

ある。武田氏が指摘された第七章の「世界教会協議会エヴァンストン大会の準備」の節についても、そういう問題が出てきた。この準備委員会は前後三回行われたのであるが、一九五三年夏のサン・リュックでの「トウルナイゼンと共に送った楽しい休暇」と結びつけるため、その直後の第三回準備委員会のことに一言ふれて、直ちに、問題の一九五一年七月の第一回準備委員会のことにかえて（「バルトの生涯」五六―一三頁）、さらに一九五二年九月の第二回準備委員会（五六―一四頁）、さらに「初めにふれた」第三回準備委員会（五六―一五頁）のことを述べるということになっている。またこの第一回準備委員会の記述は、本論文の「一、問題の場面」に引用したように、その「場所の設定と五人の参加者」など、プッシュの記述と武田氏の記述においても相違のない部分は、すでに述べたように、その会議の一ヶ月後の一九五一年八月二五日付で書かれた、当時インドネシアに宣教師として滞在中の、旧約学者で彼の次男であるクリストフ・バルト宛のカール・バルト本人の手紙の引用である。内容の点でも問題がないのは当然である。

ところがそれに続くエヴァンストン大会の主題などについては、バルトは「会議がアメリカ（のエヴァンストン）でなく、ニューデリーで開催されることを支持し、――さらに、主題を「教会と世界の希望」でなく、「イエス・キリスト、十字架につけられた主、世界の唯一の希望」とすることを主張したが、採択されなかったという。その第一点と、次にとり上げる武田清

子氏自身にかかわる部分の資料、また典拠は、一九五一年七月二六日付（つまり第一回準備委員会の会期の途中の、ちょうど真ん中の日に）、私設秘書キルシュバウム女史から、バーゼルの家で留守番中のネリ・バルト夫人に、会議の様子を知らせた私信である。ここでは、第一回準備委員会の討議も結論に達しておらず、その後の主題の決定のプロセスから見ても、武田氏の指摘されたのが恐らく正しいと思われるが、この会議の半ばのところでは、バルトのこのような提案が余り評判がよくなく、がっかりしていた時期もあったことと考えられる。とくに『バルトの生涯』の、その後の第二回と第三回の準備委員会へのバルトの積極的な参加の姿を見て、主題に関する委員会の最終報告書の結びの言葉の起草者に、バルトが全会一致で選ばれたことなどを考えると、バルトの主張にほぼ近いものになつて行つたという、武田氏の記憶と見解とも矛盾するものではなく、簡単に「間違っている」とは言えないと思う。

また特にこの時期には、バルトとニーバーは共に終末論を重視して「中間時」という考え方に立っていたことは確かであるが、終末論そのものについての両者の理解の内容には、いくつかの重大な相違があつたことも明らかである。今となつては、その内容を適確にとらえることはむずかしいが、さまざまな資料によつて推測することは不可能ではない。武田氏の論旨もそのような手掛かりの一つと考えてよいであらう。

武田氏の指摘される第二の相違点は、多少、訳者の責任もか

かわっているかも知れない。すでに引用したように、武田氏はこう言つておられる。《この会議のテーマについて考えている際、「ニーバーがこともあろうに終末論を除いてしまおうとしたとき、バルトは激昂して、彼としてはもう希望はないと考えて、この場から立ち去ろうとした。その時引き止めたのは、日本の女性で（）とは私のことですが、彼女はバルトとニーバーを対話のプラットフォームに導くことに成功した」と、書いています。プラットフォームというより、小さな部屋で話し合いました。しかもこれは後でふれますが、ニーバーが終末論を否定するなごということはありません。この部分のドイツ語は、こうなつてゐる。∴ wurde Barth heftig und wollte den Schauplatz verlassen - was aber jene Japanerin durch die Herbeiführung einer Aussprache zwischen Barth und Niebuhr zu verhindern wußte. 私なりに直訳すると「バルトは激昂して、この場から立ち去ろうとした」だが、バルトとニーバーの間の話し合いを表現させることによつて、それを阻止しようとしたのは、あの日本人の女性でした」となる。「対話のプラットフォーム」という言葉は原文にはなく、訳者の意訳である。また、「終末論を除いて」は、die Eschatologie auf der Seite lassen であるから、「終末論は傍らにおいて」と訳した方がよかつたであらう。さらにこの部分も、先のキルシュバウムの、家族宛の私信の一節であるので、それほど厳密な表現ではなかつたであらう。事実としては、前掲書（一九一―二頁）にお

ける武田氏自身の思い出が正しいのであろう。それによると、  
《そういうこともあつた後ですが、ニーバーとバルトの対立が  
とても激しかったものですから、私は二人に話し合つてほしい  
といいました。ニーバーも私を、自分でいうのもおかしいので  
すが、愛弟子のように思つていてくださっていましたし、バル  
トも親愛感をもつていてくださったものですから「清子が言う  
のなら、二人で話そう」ということになって、二人が話し合つ  
てくださったのです。それは、ブッシュがいうような大げさな  
プラットフォームではなく、小さな部屋でした。そこで二人が  
話し合つてくださったのを私は横に座つて聞いていたのです  
が、それは、ニーバーとバルトが初めて二人でひざを交えて話  
し合つたときでした。その時、プルンナーが窓の外を通りかか  
りまして、「あつ、ニーバーとバルトが話している。武田さんは  
上手いことしている。そんな二人のところに座らせてもらつて」  
といったのです。そうしたら、ニーバーが「そうではないのだ。  
彼女が私たちに話し合う機会を作ってくれたのだ」と即座にい  
いました。偉い先生方というのは、アジアの小娘の考えをそん  
なふうを受け止めてくださっている。本当に謙虚な方々だと  
思つたことでした」と言うのである。

それにつづいて武田氏は《伝記作家が書いていることは、す  
べて正しいとはいえないように思えます》と言つておられる。  
伝記記述も、記述である以上、必ず何らかの解釈が入ってくる。  
その限り、記者の主観を完全に排除することは不可能である。

伝記的記述の客観性について（小川）

『バルトの生涯』の著者ブッシュは、それを避けるため、「彼の  
手紙と自伝文書によつて」できるかぎりバルト自身の言葉の引  
用によつて記述しようとした。また他の人の手紙など二次的文  
書を引用する場合も、できるだけ同時代の人の、しかもできる  
だけバルト宛の手紙や文書にして「伝記的記述の客観性」を保  
とうとしたのである。訳者としても、それなりの苦心と工夫を  
したつもりである。武田氏の、体験に基づく批判に対しても、  
「バルトが間違っている」とか、「ブッシュの思い違いである」  
と簡単に言い切つてしまえないところがあると答えなければな  
らないのである。